

梳天、次梳合天、長本結ヲ、卷天、結之、ピンフク以櫛押天、末ヲ卷ハ、天々、結固了、其髪末ヲ、又かうがいにてわけて、左ヲ、小本結ニテ結天、カキ、又右ヲ、小本結ニテ同結之、略、下

〔近世女風俗考〕掃枝簪の事

古き畫どもを見るに、簪さしたるは町人のみにて、遊女のさせる體はなし、遊女の專飾りとするは、寛延より以後の事なり、

〔浪花街酒噂〕鶴人、略、中、先第一江戸で見かけぬことは大阪の女は、女郎でも素人でも、簪をさす

穴を張紙でこしらへて、髪のうちへいれておいて、其中へ指こみやす、

〔空穂物語 祭の使〕なかつたの侍従、略、中、まろきはちすの花に、かうがいのさきして、かくかきつけてたてまつる、略、下

〔源氏物語 檳柱〕ひめ君ひはだ色のかみのかさねたゞいさ、かにかきて、はしらのひわれたる

はざまに、かうがいのさきしてをしいれたまふ、

〔江家次第 第十七〕東宮御元服

唐匣、略、中、第三層納櫛、二、篋子一、婆佐美二、

〔雅亮装束抄〕御もとゞりをとること

御くしのはこのふたに、かみをまきて、もとゆひ、御くし二三枚、かうがい、かばさみをいれたり、とることつねのごとし、

〔散木弁誦集 神祇〕いなりにまいりたる人の、杉をこひければ遣はすとて、たゞ、う紙にかうがいの

さきして書つけてつかはしける、略、歌

〔新撰字鏡 魚 髭〕上、分、加、美、佐、志、〔同 竹〕簪、加、半、反、平、

〔倭名類聚抄 冠 十二 具〕簪、四聲字苑云、簪、作、舍、反、又、則、岑、反、插冠釘也、蒼頡篇云、簪、音、雞、

簪
名稱

簪
雜載